

「自分が自分になる」 2015年10月18日 明治学院教会 岩井健作

マルコによる福音書 8章31節—38節

「自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」(34)

1. 日常の自分には形容詞をつけて見つめている自分というものがあります。例えば、俺はダメな人間だ、バカだとか、また反対に、結構賢いんだぞとか、実力があるんだぞと思っている、とか。プライドを持ったり、卑下したりしている自分の姿です。喜んでいる自分。悲しんでいる自分。鬱的な自分。浮かれている自分。他人を気にしている自分。唯我独尊の自分。明るい自分、暗い自分。頑固な自分。融通無得な自分。まだまだどんどんでて来ます。しかし、形容詞を付けては表現できない固有な自分というものの、形容詞や説明では表わせない〇〇は〇〇だと、自分を自覚している部分があります。例えば「岩井健作」は「岩井健作」だと言う様に、形容詞では表わせない自分です。昔から変わらない自分であるし、周りの人が「岩井健作だ」と認めている自分です。後者を言い表す言葉に「アイデンティティー(identity)」という言葉が良く使われます。

2. アイデンティティーとは何か、と思って、外来語辞書を引いてみました。正体、身元、同一人物であること、主体性、存在意識などと説明されています。アメリカの精神分析学者エリクソンが『幼児期と社会』という本の中で、アイデンティティーとは生まれた時からずっと自分だということの連続の意識、もう一つはまわりの人から自分が受け入れられ、認められている存在感を実感することである、と言っています。

3. 聖書のマルコ福音書にはイエスの有名な言葉があります。「自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」(Mk8:34)です。前段の文脈に重ねて見ました。初めてでてくる、「自分を捨て(否定する一田川訳)」というのは、形容詞のついた「自分」ではないかと、思います。形容詞を付けて表現できる様な「自分」は捨ててしまいなさい、ということです。いずれにしろ、なにがしか格好を付ける「自分」というものは、どうでもいいのではないか、ということです。私は神学校に入って、その格好を付ける「自分」を鉛筆指摘されて、「本当にまいりた」経験を思い出します。「岩井の、そういう所がアカンところや」と。それに足をさらわれない様に自覚を深めて、この歳までまいりましたが、今に至るも、「自分を捨て続けて」います。いまだに「捨てられて」はいません。だから、生きている限り「捨て続けなアカン」と思っています。

4. 二番目の「自分」は「存在する自分」のことですが、これは宗教的(聖書的)な表現で言えば、「生かされている自分」「共生の命を許されている自分(自分は独りであるがゆえに共に存在させていたい)いる」「神との関わりに生かされている」という実感です。その自分が、『歴史』の中に生かされている限り、様々な抵抗、課題を負って生きています。それは人それぞれに違うこともあり、また同時代の共通の課題もあります。(例えば「戦争と平和」「国家と宗教」)。このことを「十字架」という表現に集約しているのが、「自分の十字架を負って」ということだと理解しています。「十字架」は命を奪う諸力の象徴です。事実イエスは、命を十字架上で奪われました。そのイエスの後を追って(従って)、生きなさい、というのが、この箇所の「招き」です。イエス(神)の招きである以上、私たちはひたすら「招きに応じて」生きれば良いのだ、またそのことは可能なのだと思います。その全過程を「自分が自分になる」と表現して見ました。

5. 神戸で尊敬していた教員山下さんは、自分にとって教会とは「山下が山下にな所だ」と言つておられたことが忘れられません。アラヤウ歌んでいた。つきつめて しもべーんかためなりし 一會の思ひ  
あたためて來しを"(山下長治郎歌集 P.100)。イエス(神)ヒトの出会いとあたためて来たのは、つき  
つめれば、自分というこゝ一人のためなのだ、ヒトの、永遠との出会いごと自分で、自分によっていく"恵み"を  
詠んでいます。鹿島県筑波島の小学校を出て、東京と伊豆とを重ね、1928年矢部喜好牧師から受洗、  
生涯清貧で、1946年神戸教会に転籍以来、誰かよりも忠実な信仰と教会生活を送り、岩井を  
この教会の牧師に招聘した、中心的人物でした(1907~1993)。歌集は笠原栄光氏と私が出版  
しました。